

# 東京経済大学報

2018年度 第51巻 第2号

TKU  
120

CHALLENGE 2020  
SINCE 1900

あと1年で、創立120周年



## 新たな一年、出発に際して

謹んで新春のご祝詞を申し上げます。みなさまには平素より本学へのご支援・ご厚情を賜り、ありがたく厚く御礼申し上げます。

本学にとりまして創立120周年の節目の年となります。2020年に向けて、現在は「創立120周年記念事業」の実現に邁進しているところでございます。この記念事業では、教育・研究の一層の充実を図ることはもとより、国分寺キャンパス第2期整備事業としてそれを支える施設や環境の整備にも取り組み、本学のさらなる発展の基礎を築くことになるものと考えております。さらには、「東京経済大学120周年史」の編纂、創立120周年を記念した特別展示などを計画し、着々と準備を進めております。

また、駅伝大会での活躍を支援する事業、学生たちが本学で成長していく姿を記録していく事業など、大学ならではの計画も盛り込んでおり、東京経済大学の現在をさまざまな角度からご披露申し上げることができる内容でもございます。

これらの記念事業の実現は、すでにご協力をお願いしております「東京経済大学創立120周年記念事業募金」への寄付金に依るところも大きく、これまでにたくさんの方々のご理解・ご賛同を得て参りましたことには深甚なる感謝の意を表したく存じます。

しかしながら、総事業費90億円を予定しております記念事業を推進してまいりますには、引き続きみなさまから絶大なるご支援をお願い申し上げますところでございます。

2019年の新春を迎え、創立120年までは余すところ1年となりました。創立120周年の記念事業は必ずや「東経大ブランド」の一層の確立に寄与するものと考え、その実現に向けた「チャレンジ」を加速させていくよう努めてまいります。みなさまには本年も倍旧のご厚誼を賜りたくお願い申し上げます。

学校法人 東京経済大学 理事長  
後藤 鉄四郎



皆様、あけましておめでとうございます。

1900年創設の大倉商業学校を淵源とする本学は、戦前の経済・商業系の専門学校から戦後に大学に昇格した他の伝統校と比べても、抜群の長い歴史を誇る伝統校といえます。この「伝統の東経大」をさらに発展させることこそ、学長としての私の使命だと考えています。

本学は長きにわたって高い研究水準を誇る教授陣を擁する大学として評価を得てきました。私は、このような評価の上に「東経大は教育力のある大学だ」という社会の評価を確立することこそ、「伝統の東経大」を復活させるカギだと考えています。

私はかつて「日本の大学で他国よりも優れている制度はゼミであり、ゼミにおける人間教育である」と書いたことがあります。アクティブ・ラーニングの強化が叫ばれている今、その確信はますます深まっています。ゼミこそ「顔が見える教育」、アクティブ・ラーニングの原点であり、学生と教員が相互に切磋琢磨する場です。

幸いにも、本学経済学部の石川雅也ゼミのチームが昨秋「第14回日銀グランプリ」最優秀賞を獲得したように、本学のゼミ活動は着実に実を結びつつあります。私は、「ゼミする東経大」の一層の充実を「教育の東経大」の中心柱としたいと思っています。

「教育の東経大」のあと二本の柱は、いずれも大倉高商の教育として定評のあった英語教育と実学教育の強化を図ることです。その第一歩として、英語のみで学習・生活する「英語村」、難関資格試験に挑む学生を支援するための特待生寄宿舍、さらに学内でゼミ合宿ができる施設などの整備についても早急に検討を開始したいと考えています。

皆さま方のご理解とご協力を、よろしく申し上げます。

東京経済大学 学長  
岡本 英男



# 東経大 「総合教育科目」の 現状と課題

新正裕尚 全学共通教育センター長・経営学部教授

東経大の教養系科目（「総合教育科目」）のもっとも大きな特徴は、教養担当の専任教員も学部専門の教員と同様の形式の演習（ゼミ）を開講し、卒業研究も担当しうることでしょう。学部のゼミ・卒論と全く同じ扱いであった時代が長く続いたため、教養科目担当教員の下で卒論を書いた学生も多数いました。その後カリキュラム内での位置づけには変遷がありましたが、根幹の部分には変わりがありません。ここではそのような「総合教育科目」の現状と今後の課題について私見を述べます。

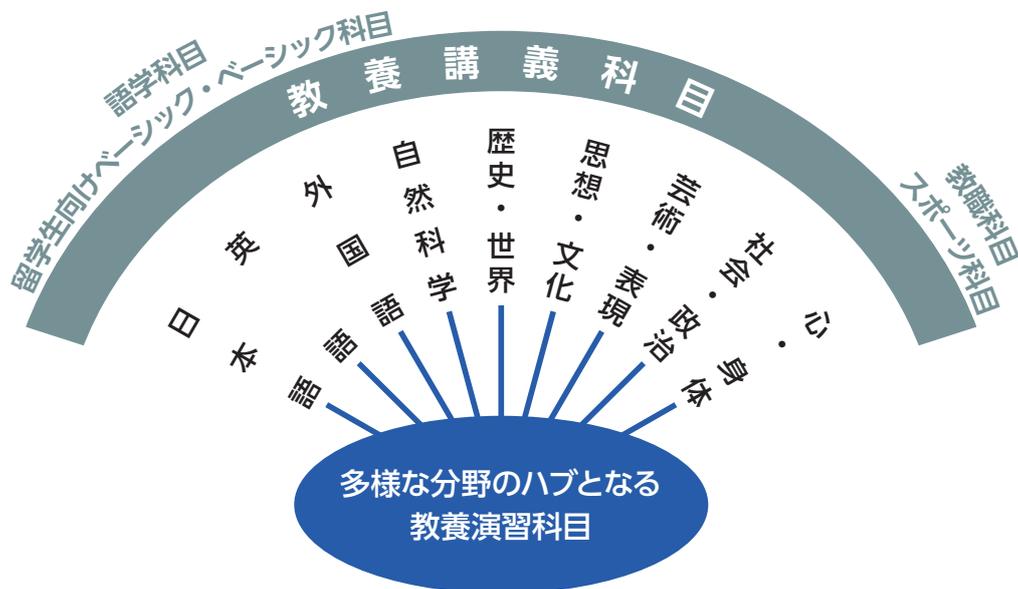
## 「総合教育科目」のあり方

教養部門のカリキュラム編成等に携わっていたとき個人的に頭に浮かんでいた言葉は「不易流行」です。文学に疎いため聞きかじりの言葉を誤用しているだけかもしれませんが、まず我々は歴史、思想、文学をはじめとして時を超えて不変で普遍的な内容を含む科目を大切にしてきました。一方、2009年カリキュラムからの「ベーシック科目」の導入など、多様な学習履歴を持った学生の学習スキルを向上させる科目も拡大しており、時々の学習ニーズに合致する方向性も当然探っています。このような時代に沿う改革では単に科目を置くだけでなく、どのようにして必要な学生を履修誘導するか、安定して科目担当者を確保するかなどカリキュラムマネジメント全般に注意して取り組みを進めてきました。このような考え方はカリキュラムの設計レベルだけのものではありません。個々の科目レベルでも、古典的な題材を扱いつつも、今を、未来を生きる学生にとって必要な基礎知識を提示し、ものの見方を涵養することをそれぞれの教員が目指しています。

## 多様な学びを保証する

「総合教育科目」は一部の英語科目と「コ

多様な分野からなる総合教育科目のハブとなる教養演習科目



コンピュータ・リテラシー入門」を必修とし一部科目を学年指定としていることを除くと、ほとんどの科目について自由選択で1～4年の好きなときに学ぶことができます。

自由選択といっても、履修してみたい科目がなければ困りますから、多様性の担保も教養分野における大きな留意点です。もちろん限られた人員で森羅万象をカバーすることはできませんが、教員人事・開講科目の計画においては分野等のバランスを慎重に考慮しています。

例をあげると英語以外の語学は必修科目から選択科目へ移行して以来履修者は大幅に減りました。そこで常設の語学（ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、中国語、朝鮮・韓国語、日本手話）の開講コマ数を履修者数に応じて適正化するとともに、特別語学として多様な語学科目を開講しています（2009年カリキュラム以降には、アラビア語、ベトナム語、ポルトガル語、モンゴル語、ロシア語、ビルマ語、タイ語、トルコ語から各年度2～4科目を開講）。もちろん開講する語学の選択に関しては多様性の観点のみならず、過年度の履修動向等ニーズも勘案しています。英語科目においても必修科目から選択科目への履修の系統性を明確にするとともに選択科目の豊富化を図っています。

スポーツ科目でも開講種目の工夫や実技に理論を加味した授業展開などの取り組みが始

まっています。

演習系科目の展開

堺前学長時代に「ゼミする東経大」というフレーズでゼミによる教育を前面に打ち出した学外広報が展開されましたが、岡本学長をはじめとする新執行部においてもゼミを中核に据えた教育力の向上を目指す方向性が示されています。

2015年カリキュラムでは教養演習科目群を設置し演習系科目の強化を図りました。その意図は2点に集約されます。

まず従来からあるゼミ（総合教育演習）を軸とした演習系科目の系統化です。1年次2期に配当の「教養ゼミ」は多様なテーマを取り扱い、いわば「総合教育演習」の入門編となるような役割を果たします。2～4年次の「総合教育演習」と「総合教育研究」は従来の方式を踏襲しつつ、履修を勧める様々な宣伝活動を行ってきました。2017年カリキュラムからは経済学部・経営学部については「進一層科目」カテゴリに配置されたことにより、学部専門の演習科目と同じ履修区分に入りました。さらに経済学部・経営学部で先行的に実施されていた「研究ノート」（3年次生に対するプレ卒論的な位置づけの科目）も導入予定で系統的学修の強化が期待されます。一方でゼミや卒業研究が必修でない学部の



2017年度総合教育演習ゼミ発表会の1コマ

学生の場合、資格試験等に集中したいといった理由をはじめとする様々な事情でゼミ所属のない学生が一定数います。そのような学生を含め、半期完結で負担のない形で少人数授業に触れてくれることを望んで「総合教育ワークショップ」を開設しました。また、昨今のグローバル化のために要請される、英語で運営される授業に対応する可能性を勘案して「英語で学ぶ教養」も開いています。これら気軽に履修できる演習系科目は「教養ゼミ」を含めて、幸い履修希望者の多い状況で推移しています。

## 今後の展望

文科系学部を擁する私立大学に奉職する教員である我々は、ワンルームマンション状態の研究個室を構えて、それぞれが個人商店主的になる傾向があります。たとえば演習も理科系の研究室単位のゼミとは異なり個々の教員単位なので、ゼミに個人名が付されて「◎ゼミ」と普通に呼ばれます。すると、ともすれば他の教員がどのような研究をしていて、どのような教育を行っているか、相互の理解が薄い状況に陥りかねません。そのような離散化はとりわけ一人一分野の傾向が強い教養科目グループ（全学共通教育センター）において起こりがちでしょう。

そこで、全学共通教育センター所属教員相互のコミュニケーションを活発化し、それを教育に活かす工夫が必須です。取り組みの例として、総合教育演習のゼミ報告会を、本学で早くからゼミ研究発表会を始め発展させてきた経営学部の軒先を借りる形で、2012年度から開始しました。その後徐々に参加ゼミを増やし暮れの行事として定着しています。報告の形式や発表時の服装などは自由にしてカジュアルな雰囲気のもと、学生からの質疑も盛んに行われており、教員の立場から他ゼミの教育内容や雰囲気も理解できる集まりとなっています。それを追って、2014年度からは総合教育研究の発表会も行なっています。このように教養部門においても、ゼミが多様な分野の教員・科目の集合体における教育上のハブとなるのでしよう。

このような教員間の協力体制がスムーズに行われ、新しい発想を生み出すことができるような、教養部門の運営体制が今後も担保され、発展してゆくことを望みます。そのためには全学共通教育センターに属する個々の教員が大学全体の教育方針を理解し、教養科目の果たすべき役割の認識を深めることが求められるでしょう。これまでも述べたゼミ教育での貢献以外に、特に低年次生との接触場面の多いわれわれは、大学での学びの導入時にある学生の学習への興味、意欲の涵養につながる様々な教育手法の工夫に努めるべきであると考えます。

## 新学科開設の背景

本学の経営学部は1964年に経済学部商学科を改組する形で開設されました。日本の高度経済成長とともに企業のマーケティング活動も活発化し、流通面でも大手チェーン店の伸長や、コンビニエンスストアなど多様な小売り業態の誕生、高度な物流情報システムの開発など、90年代までに様々な変革が起きました。また、実社会における流通・マーケティングの重要性が高まっただけでなく、伝統的な商学に加えて、アメリカを中心に発展したマーケティングや消費者行動研究に従事する国内の研究者も増加しました。このような時代背景のもとに、1998年4月に流通マーケティング学科が誕生しました。開設時のパンフレットには、「高度情報化社会、国際的大競争、生活者優先の時代の市場創造を担う人材の育成」が謳われ、21世紀に向けた新学科としてスタートしました。

## カリキュラムの特色

新学科開設から今日までの間には、経営学部および全学のカリキュラム改革や教学改革と連動する形で何度か変更があったものの、流通マーケティング学科の基本方針に変わりはありません。

第一に、科目構成は伝統的な商学分野に止まらず、理論・政策・歴史といった異なる観点から20以上の専門科目が開講され、そのレベルにより1年次、2年次以上、3年次以上で段階的に履修するように設計されています。2004年度の

# マーケティング学科

## 20周年に寄せて

副学長・経営学部教授 岸 志津江

カリキュラム改革では「流通論」と「マーケティング論」を選択必修として、基礎をしっかり学ばせるようにしました。マーケティング系を例に挙げると、「グローバル・マーケティング論」「ソーシヤル・マーケティング論」「インダストリアル・マーケティング論」「サービスマーケティング論」といった各論まで整備され、すべてが専任教員により開講されています。

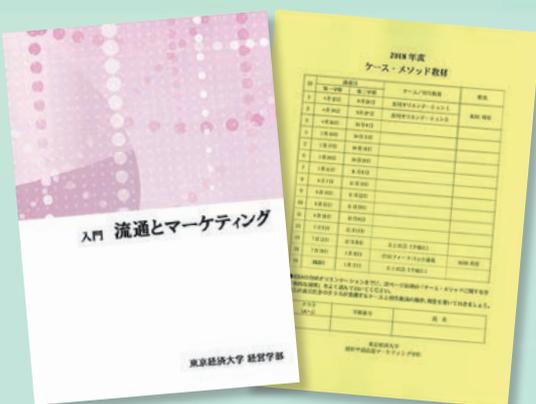
第二に、そして流通マーケティング学科の最も特徴的なことは、「実践」を重視していることです。近年では、小中高等教育でも生徒が能動的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」が浸透しつつあるようですが、流通マーケティング学科では20年前から「ケース・メソッド」と「企業研修プログラム（当時はオフ・キャンパス・プログラム）」を専門教育の総仕上げとして、3年次の選択必修科目という重要な位置づけをしてきました。

「ケース・メソッド」では20名くらいの少人数クラスで事例を分析し、問題点や解決策を討議し、レポートを作成します。慶応義塾大学ビジネススクール（経営学大学院）で使用するケースや、本学担当教員が自ら作成したケースを使用しています。「ケース・メソッド」という教授法について理解を共有するために、開講初年度には木村立夫教授のゼミ生がケース討議する様子を見せていただきました。

「企業研修プログラム」は現在では選択科目となっていますが、学科開設当初は毎年約100名の学生が、20社近い大手企業で研修を受けるほど盛況でした。

2001年度の派遣先には、オンワード樫山、花王販売、京王百貨店、国分、藤沢さいか屋、サンエス、西友、セブンイレブン・ジャパン、トククツ、東芝物流、西川産業、日立物流、丸井、マンダム、リーガルコーポレーション、菱食、サミット、東急エージェンシー、エヌ・ティ・ティ・ナビスペースと、メーカー、卸、小売り、物流、広告、インターネット・サービスを含む、多様な業界における19社が含まれています。これだけの協力企業を確保できたのは、宮下正房教授のご尽力と葵流通会会員各位のご協力に依るところが大きいです。

さらに、もう1つの大きな特色は、活発なゼミの研究活動です。理論にもとづく実証研究に加えて、より実践的な戦略プランニングや、企業とのコラボレーション企画を行うゼミもあります。たとえば、本学の卒業生である本藤貴康教授（流通論）と小木紀親教授（マーケティング論）のゼミでは、企業とのコラボレーシ



左「入門 流通とマーケティング」、右「ケース・メソッド」教材

ヨンによる製品開発やプロモーションに取り組んでいます。現在の専任教員のうち学科開設時から在籍している教員は中光政教授、近藤浩之教授、田島博和教授、私の4名のみとなり、若返りが進んでいます。若手教員を中心に、夜まで学生の研究指導にあたり、論文コンテスト等にも積極的に応募し実績を挙げているゼミもあります。2015年4月から続いているJRの車内広告「ゼミする東経大」にふさわしい活気を維持していることは、誇らしいことです。ゼミの運営に止まらず、流通マーケティング学科からは副学長や学部長、教務主任、全学教務委員長などの役職を担う教員も選出され、学部および大学運営にも一定の貢献をしようようになりました。

## 盛大な開設記念行事

流通マーケティング学科は開設当初、2つの大きなイベントを実施しました。98年秋には学科開設を記念して「21世紀における流通マーケティングの方向を探る」というテーマの下に3回にわたって本学で大規模な講演会を開催しました（後援・・・東京商工会議所、日本マーケティング協会、日本小売業協会、日本卸売業協会、国分寺市）。学外からは、アサヒビール(株)社長の瀬戸雄三氏、(株)セブン・イレブン・ジャパン副会長の清水秀雄氏、(株)西友社長の渡辺紀征氏をスピーカーとしてお迎えし、本学からは中川十郎教授、木村立夫教授、宮下正房教授が登壇しました。続いて、2000年10月には本学の創立100周年記念学術行事の

# 流通マーケ



流通マーケティング学科開設記念講演 アサヒビール(株)社長の瀬戸雄三氏



「創立100周年記念講演・シンポジウム」左からジャスコ(株)名誉会長の岡田卓也氏、(株)菱食社長の廣田正氏、(株)資生堂社長の福原義春氏、宮下正房教授

一環として、丸の内の東商ホールで「21世紀における経営と流通マーケティング——IT革命時代への対応——」というテーマで講演とシンポジウムを開催しました。土屋守章教授による講演に続き、シンポジウムでは宮下教授の進行により、ジャスコ(株)名誉会長の岡田卓也氏、(株)菱食社長の廣田正氏、(株)資生堂社長の福原義春氏にご登壇いただきました。

学科開設10周年にあたる2008年には、経営学部1年生全員が履修する「流通マーケティング入門」のテキストとして、「入門 流通とマーケティング」という本を専任教員の分担執筆により作成しました。既に退職なさっている木村立夫教授、石井寛治教授（日本学士院会員）、

## 未来の社会を担う人材の育成

流通マーケティング学科が開設された90年代末には、「ミレニアム」という言葉にまだ見ぬ未来への期待が込められていたような気がします。実際に新世紀を迎えてみると、想像以上のスピードで情報通信等の技術革新が進んでいます。一例を挙げると、車の燃料はガソリンから電気になり、移動手段には自動運転やカーシェアなどのサービスも含まれるようになりました。今や様々なモノがインターネットにつながり、AIが制御する第四次産業革命の時代に入りつつあります。流通マーケティングに関しては、「デジタル」と「ビッグデータ」がキーワードとなり、生産から流通、コミュニケーションにわたる広範な過程に変革が起きている。

大学は未来の社会を担う人材を育成する場ですから、このような変化に対応できる能力の開発にも注力するべきでしょう。それは目まぐるしく変わる現実の表層を捉えることではなく、その背後にある本質を見極め、将来のために何をすべきかを確に判断し実行に移す能力ではないでしょうか。技術革新やAIの脅威に翻弄されることなく、顧客志向というマーケティングの原点を見失わずに、私たちは21世紀のグローバル社会で活躍する人材の育成を続けていきたいと思えます。（注本文中の社名および役職名は当時のものです）

# 2018年度・国際シンポジウム 「国際出版研究フォーラム」 The International Forum on Publishing Studies 開催

国際シンポジウム 実行委員会委員長 和泉澤 衛 現代法学部 教授



## 1 成功裏に 国際シンポジウムを開催

昨年11月10日(土)、本学・2号館(メイン会場は、B301教室)において、本学・学術研究センター主催の「国際出版研究フォーラム (The International Forum on Publishing Studies)」が開催されました。これは、東アジア地域、具体的には日本・中国・韓国の出版学会が中心となって定期的に催されている国際学会・シンポジウムであって、今回はその18回目を迎えたもので、日本での開催は6年振りとなります。

日本出版学会の創立50周年記念事業としての協賛も得て、海外からの参加者約30名を含め、全体で百人近くを数える参



集により、成功裏にこの国際シンポジウムを終えることができました。その一端をご紹介しますこととします。

テーマとして今回の主題は、「出版メディア・出版学の新たな展望」というものであり、これを4つのセッションに区分して、参加各国からの報告発表及びフロアからの質疑応答というスタイルで展開されたものであります。それぞれ充実した内容ですが全てをお伝えするのは紙幅の関係で難しいので、その一部を後述します。

ご承知のとおり、「出版」なるものは単なる学問的領域だけではなく、現実の出版事業・出版産業という経済的活動と密接不可分の関係にあります。すなわち、現代的には、17世紀のグーテンベルクの印刷革命以来5世紀にわたって君臨してきたという常識となっていたこれまでの紙の印刷媒体によるものだけではなく、電子情報やインターネットを通じたものが登場し、隆盛を見せ始めているのであります。そうした焦燥感・危機感もあつてか、研究者のみならず内外の実業関係者もこの国際シンポジウムに参加されてきました。学術研究機関としての「大学」が、こうした産学共同の姿で問題提起・インパクトを与えていくことは非常に重要なことと考えています(これに読者・消費者を加えていくことが今後の課題でもあります)。



## 2 見たり聞いたりするのは 実際にやってみるとでは 大違い!

まず最初に、舞台裏の話?で恐縮なの

ですが、率直に私の実感を申し上げます。6年前の時は報告発表者の一員に過ぎなかったのですが、実際、実行委員長の立場になると「こりゃ、多くの方にお世話になることによって、はじめてこうした成果が生まれるのだなあ」ということです。

日程調整や来日者・報告発表者確定などのドタバタは当然としても、こうした会議の通例として予稿集(発表論文)をあらかじめ日・中・韓のそれぞれの言語に翻訳して用意するのですが、これほど大変とは思ってもよらなかったということです。もちろん、その言語に精通している学会のメンバーなどには願いますが、専門用語や機微に渡る表現などもあって、準備するだけでも一筋縄ではいきません。細かい話ですが、各国の報告者が発表時にスクリーンに投影する図表や要点提示についても、報告者の国の固有の言語ではなく英語による統一表記にしてみようなど、先方との交渉も含め国際会議ならではの苦労もありました。我々研究者(学者)は国際シンポジウムだから当たり前と考えていても、いざ実際に実業の商売として外国に赴いて営業・販売活動をする場面では極めて難儀なことであろうと痛感いたしました。そうした意味では、トランジスタラジオのソニーはじめ自動車産業など、日本のモノ造り技術の製品を海外進出させていった先人達のご苦労が身に沁みます。

また、同時通訳の方々のご活躍にも敬服いたしました。報告発表ならば予稿集もありまずし、時間の制約の関係で報告者に口頭発表用の下原稿も事前用意をい



ただいていたのですが、質疑応答の時はそうはいきません。今回の国際シンポジウムの場合は、日本語⇨中国語と日本語⇨韓国語の同時通訳を外部に委託してお願いしたのですが（三か国の言語を全て同時に通訳できる方は稀有でなし、予算の関係もあって・笑）、報告発表の時のスピードでレシーバーに入っていましたから、その感覚でフロアからの質問があり演台の発表者も応答するのですが、例えば韓国語⇨中国語の場合には、実際は韓国語⇨日本語⇨中国語という経路で通訳されるので「時差」が生じて、質疑応答でウイットな笑いを誘う状況では、会場の笑い声が時差で起こるといったこともありました。それにしても、同時通訳さんのプロの力量を感じた次第です。

さらに、会場までの路上案内板や会場演壇奥の横断幕型のプレート設置など本学の事務職員のお世話になりましたし、本学の院生・学生にも各種のお手伝いをたいており、感謝に堪えません。

### 3

## 今回の国際シンポジウムの概要・コンテンツ

(ア) 詳しくは追って発行される本学・学術研究センターの記録資料をご覧くださいければと思いますが、いくつか簡潔にこの国際フォーラムの模様をご紹介します。

全体のテーマは「出版メディア・出版学の新たな展望」というもので、これについて、「出版史の視点から」・「出版産業の視点から」・「出版制度の視点から」・「出版技術の視点から」という四つのセクションに区分して報告発表と活発な質疑応答が行われました。

(イ) 第一の歴史的な視点からは、韓国からはハングル文字の誕生と現在に至るまでの状況が報告されました。ハングルは表音文字です。日本でいえばカタカナの五十音に相当するのですが、韓国歴史下ラマでご存知の方もいるかもしれませんが、朝鮮の四代王である世宗（セゾン）が一四四三年に「訓民正音」として漢字の読めない当時の民衆でも簡単明瞭な音声記号の組み合わせで表現できるものとして創製したものです（母音記号五つとアカサタナなどの子音の行の記号さえ理解すれば、その組み合わせなので誰でも発声できる世界的にも珍しい表音文字体系です）。ただ、出版という面では、世界最古とされる木版や金属活字の技術を持ちながらも、それは貴族支配階層や官僚の掌中に止まり、一般大衆への書籍の自由な流通を阻害する結果となったなどが紹介されました。中国からは、紙媒体と電子媒体の違いや変容に関する研究発表が行われました。印象的だったのは、

「閲読」の意味として、「閲」は光を受容して処理するという人類生まれながらの性質で、「読」は文字記号を解読して頭の中で音声記号に変えるという生後から習得する技能であり、これまで構築されてきた読書メカニズムが、今、「読」の時代から「閲」の時代へと移ってきているというものでした。また、日本からは、戦前期の上海における邦字学術雑誌（東亜同文書院の「支那研究」）をめぐる研究報告が行われましたが、実は、発表者は本学大学院の博士課程に在籍している中国からの留学院生（女性）でありました。もちろん、原文は日本語の論文で発表も日本語、中国からの参加者の質問に対しても日本語で応答するということで、グローバル化の進展を目の当たりにした次第です（なお、応答については、前記の同時通訳の事情？をご存知で、それを配慮していただいたのかもしれませんが……）。

(ウ) 第二の出版産業の視点からは、中国からは中国におけるネット文学の現状と課題の研究報告が、韓国からは韓国出版産業について文字の紙媒体の出版業と音楽・映画・アニメなどの各種コンテンツ分野とを比較しつつ現状と課題の研究報告が、また、日本からは戦後雑誌メディアにつき、アメリカという日本にとっての「他者」がどのように表象（受容）されてきたかを音楽雑誌を例として研究分析した報告が行われました。

(エ) 第三の出版制度の視点からは、韓国からはメディア環境の変化に伴い韓国の出版制度（政策）の現状と未来志向的な方向性の提起を内容とする研究報告が行

われ、中国からは「新出版・新読者・新編集者」と題してデジタル化への対応・転換に関する研究報告が行われました。日本からは、著作権制度の動向と課題について、近年の日・中・韓・香港・台湾における著作権法をめぐる現状や米国におけるGoogle Books訴訟事件を例としてデジタル・アーカイブ（図書館の蔵書が自宅のパソコンで読める等）の進展に非英語圏も対処していかなければならぬとの研究報告が行われました。

(オ) 第四の出版技術の視点からは、中国からはデジタル化時代の教育出版を例とした研究報告が、韓国からは図書コンテンツの相互テキスト性（互換性）の向上を図るための技術的戦略的な研究を内容とする報告が、日本からは活字出版物のバリアフリー化（視覚障がい者など）を進めるための研究報告が行われました。

(カ) 多岐にわたる充実した内容について、いずれもコンパクトに報告発表いただき、活発な議論はシンポジウム後の立食レセプションの会場でも続くほどで、盛況理に終了することができました。

### 4

## おわりに

この国際フォーラムは、引き続き今後とも定期的に催していくことが大事で、やもすると緊張関係となる国々において、こうした活動を通じて国際的な相互理解と協調が進んでいくものと確信しております。

末尾になりましたが、本学の学術研究センターにご助成を頂戴し、篤く御礼を申し上げます。

俳優  
**山中崇さん**  
(コミュニケーション学部卒業)

TAKASHI YAMANAKA 1978年、東京都生まれ。2000年、東京経済大学「コミュニケーション学部卒業。学生時代より演劇活動を始め、多くの舞台に出演。以降、映画、ドラマ、CMなど幅広く活躍中。主な映画出演作として、「松ヶ根乱射事件」「アウトレイジ ビヨンド」「怒人たち」「あゝ、荒野」など。ドラマでは、連続テレビ小説「ごちそうさん」「インセント・デイズ」などがある。近年の舞台出演作に、「リチャード三世」「消えていく朝」等、数々の作品に出演。2019年は、映画「アライヴ」が1月26日より、「ねことじいちゃん」あの日オルガン」が2月22日(金)より、それぞれ公開予定。ドラマでは、「テレビ大阪・BSテレ東「面白南極料理人」の放送も1月から始まる。



連続テレビ小説「ごちそうさん」をはじめ、数々の作品で唯一無二の存在感を放つ俳優・山中崇さん。役者を志した原点は、さかのぼること19年前、東京経済大学の演劇研究会で過ごした日々にあった。クセのある役柄を演じることも多いそのイメージとは裏腹の人懐っこい柔らかな笑顔で、学生時代の思い出を語ってくれた。

**通学時間も惜しかった  
演劇漬けの大学生活**

——東経大のコミュニケーション学部へ進学した理由を教えてください。

高校生の頃は環境問題に関心があつて、その解決に関わる仕事に就きたいと思つていました。でも塾の先生に「それなら官僚になるといい」と言われて大人しく諦めました(笑)。社会ってなんだろう、人ってなんだろう、ということにも興味があつたので、社会学部がある大学を調

べていたところ、東経大のコミュニケーション学部存在を知ったんです。当時まだ2期目で未知数というのもワクワクしたし、「コミュニケーション」というゾーンの広い学びの中から好きなものを突き詰めていけるのは自分に合っていると思い、入学を決めました。

——大学入学後すぐに、演劇研究会に入られましたね。

演劇か映画のサークルか迷っていたんですが、たまたま出会った先輩の人物に惚れて演劇研究会「劇団みつばち」へ入

会しました。正直、当時の東経大の演劇って、早稲田や明治と違って別に有名でも盛んでもなかったんです。でもなんだかやたら面白い人が集まっていたんですよ。いまま演劇を続けている先輩もいるし、後輩にはお笑いタレントの川村エミコさんもいたりしてね。当時の仲間とは、20年近く経つたいまも交流があるんですよ。

演劇することにのめり込むきっかけになったのは、1年の初舞台です。役は「7代目ドラえもん」(笑)。もともと引つ込み思

# がむしやらに舞台に立ち続けた あの頃の自分に負けたくなくて

「数出ればいいってもんじゃないよ」と助言ももらったけど、当時は「いまは出る時期だ。板の上に立つことが大事なんだ」という確信があったんです。ただ、授業も出たいし飲み会もあるしで、本当に忙しかった。通学時間が惜しくて、国分寺に住んでいる友達の家によく泊めてもらっていました。

——八巻俊雄先生（現・名誉教授）のゼミでは広告論を学んだそうですね。

コミュニケーション学部で学ぶうちに、広告そのものに興味が湧いてきました。当時は広告業界が潤っていた時代でしたし、面白いものが多かったんですよ。授業では「20〜30代の男性サラリーマンをターゲットにした缶コーヒーの新聞広告を作る」というお題をもとに、コピーとデザインを考えたりしたこともありました。他の学生より面白いものを提出してやる、って必死でしたね。

八巻俊雄先生のゼミは大変な人気で、抽選でなんとか入れた記憶があります。広告が好きなんです、という話をしたら目をかけてくださって、八巻先生が使う資料を国会図書館で探してくるお手伝いをさせてもらったこともあります。文献を読むのもレポートを書くのも全く苦ではなかったですね。広告業界で働く夢は叶わなかったけど、いまCMなどのお仕事をさせて頂く機会もあって。縁って不思議なものですね。

卒業制作は、友人と2人で東経大のP

R動画を制作しました。絵コンテを書いて、出演し、撮影・編集して。いまにして思えばアレでよく卒業させてもらえたなと（笑）。先生方に感謝しています。

## 父の言葉を支えに 就活をやめて役者の道へ

——一度は就職活動もされたとか。

周りの友達が急にスーツを着始めて焦ったのと、大学まで行かせてもらったから就職しなければという思いもあったんです。それで一度だけ企業説明会に行っただけですが、ある講演で「もし中途半端な気持ちでここにいるなら、運良く会社に入れたとしても続かないよ」という話を聞いて、ああその通りだなと目が覚めました。

実是在学中に父が他界してしまったのですが、病床で「金銭的に貧しくなっても心は貧しくなるなよ」と言われました。父なりの方法で、俳優の道へ進むうとする僕の背中をそっと押してくれたんだと思います。その後、決して楽な道のはなかつたですが、なんとかこの仕事を続けてこられました。

——いまや、数々の映画やドラマ、舞台でご活躍です。名バイプレーヤーと称されることも多いですね。

僕ね、初めて入ったお店で「よく来ますよね？」って言われることが多いんです。見覚えはあっても俳優としてあまり認識されないというか。それってどうな

んだと思うことも正直ありますが（笑）、俳優のあり方として考えた時に、顔と名前がそれほど一致しない分、作品ごとに「役に染まれる」「違うイメージに捉えてもらえる」というのは、いい状態なかもと思ったりもします。

心がけているのは、「悪い人を好きになり、いい人を嫌いになる」こと。どんな作品でも、描かれているのはその人物の「人生の一部」にすぎません。例えば、家族の前ではどうなんだろうとか。逆がいい人を演じる時は、どこかに下心はないのかなと探ったりする。どうしてそういう行動をとるのか。どうして感情が動いたのか、人について考えるのは昔から好きだし、大切にしているところですね。

若い頃は、キャリアを重ねればどんな役でも難なく演じられるようになるのだと思っていました。実際は逆で、どんどん怖く、難しくなるんですよ。でもだからこそ、がむしやらで何も知らなかった当時の自分には負けたくない。あの頃の気持ち忘れず、作品ごとに自分を高め、更新し続けていきたいと思っています。

## やらない後悔はするな もっと貪欲に楽しもう

——東経大の好きなところは。

こぢんまりした、あつたかい雰囲気が好きでしたね。それは空間という意味でも人間関係という意味でも。

いまだに忘れられないことがあるんです。土曜の1限が英語だったんですが、僕は遅刻しがちだったし決して優等生ではなかった。でも何かの機会に先生に「劇団みつばち」の公演のチラシを渡したら、

わざわざ足を運んでくださったって。作品や僕の演技についての感想も熱心に伝えてくれたんです。あれは本当に嬉しかったですね。

思い出深い場所は、やっぱり公演をしていた葵陵会館小ホールとか、部室棟ですかね。あと新次郎池、まだありますよね？ よかった（笑）。静かで落ち着くから、一人になりたい時にたまに行っていました。それと、国分寺駅からキャンパスまでの道は好きだったな。朝は坂道を登りながら「これから授業行くぞ」ってスイッチが入るし、帰りは下りながら脱力できるから。

——在校生へ伝えたいことは。

大学に入ると、それまで敷かれていたルールが急になくなる感覚がありました。どう進むかは自分次第、正解は誰も教えてくれない。だからこそ、気になることがあつたらまず動いてみる。僕はそれがたまたま演劇でした。自分の人生なんだから、自分で決断し、自分の責任において行動すればいいんだと思います。

やらない後悔より、やってする後悔の方がいい——。これは、芸術家・園本太郎さんの著書『自分の中に毒を持って』に記されていた内容で、大学時代に読んで以来、ずっと僕の心の支えになっています。若い皆さんにも送りたいと思います。

——最後にもう一つ教えてください。もし大学生活をやり直せるなら？

まず、好きな授業ばかり出てガッツリ勉強します。それから先生方の部屋にどんどん押しかけて、人生の大先輩から色々なことを教わりたいですね。皆さんも、いい意味で大学をもっともっと利用して、濃い日々を過ごしてください。

## 石川ゼミが日銀グランプリで最優秀賞を受賞



2018年11月23日(金・祝)、日本銀行本店で開催された「第14回 日銀グランプリ ～キャンパスからの提言～」で、東京経済大学石川雅也ゼミのチームが最優秀賞を受賞しました。

「日銀グランプリ」は、日本銀行が主催する学生向けコンテストで、学生が金融・経済に関心を持ち、日本の金融・経済の現状と将来について、自分たちの問題として考えてもらうきっかけとして、2005年度より開催されています。

今回は、「わが国の金融・経済への提言」を課題として、全国52大学から147編の応募があり、大学数・応募論文数ともに過去最多となりました。論文審査を勝ち抜いた5チームが決勝に進み、プレゼンテーションと審査員との質疑応答による審査を経て、見事最優秀賞を獲得しました。

代表を務めた安部一壽也(経済3年)さんは「このような名誉ある賞をいただけて大変嬉しく思います。決勝大会まで、石川先生のご指導のもと、毎日

遅い時間までプレゼンテーションの練習をし、準備を進めてきました。本番特有の緊張感はありませんでしたが、何度も試行錯誤を重ねた提案でしたので自信を持ってプレゼンテーションできました。今回の大会で各チームから出た提案が、実社会で実現できる日がくることを期待したいです」と受賞の喜びを語りました。

石川経済学部准教授は、「プレゼンテーションと質疑応答の練習では、私以外の先生にも見ていただき、あえて厳しい意見を投げかけてもらい、それに対応する力をつけてきました。今回の提案は、大枠から細かい数値まで、すべて学生たちが一から考えました。ゼミ以外の勉強や活動もある中での準備はハードだったかと思いますが、学生たちはよく頑張っていました。このような評価をいただけて、私も大変嬉しく思います」と話しました。

また、石川ゼミの別のチームは、決勝進出には至らなかったものの奨励賞5チームのうちの一つに選ばれています。

### 【最優秀賞チーム】

安部一壽也(経済3年)、笠倉一樹(経済2年)、樋口拓郎(経営4年)、深澤広大(経営2年)  
タイトル: 所得控除連動型消費税免税マイナス金利デビットカード(免税カード)のすすめ

### 【奨励賞受賞チーム】

木村晃佑(経済3年)、館野栞(経済2年)、世坂駿(経済2年)  
タイトル: 介護施設のアモーレ～KAIGO銀座商店街～

## 国分寺の街案内ならお任せを。 「ぶんじコンシェルジュ」 が誕生!



学生ボランティアが国分寺市内を案内をする「ぶんじコンシェルジュ」が誕生しました。JR中央線国分寺駅構内にある国分寺市案内所を活動の拠点として、国分寺の魅力をも市民や国分寺を訪れる皆さんに発信していきます。

国分寺市観光協会のレクチャーを受け、認定された学生のみがコンシェルジュバッジをつけ対応にあたることができ、現在、ぶんじコンシェルジュ星1つに認定されている学生は18名で、今後国分寺検定等の試験を受け知識が増えるとコンシェルジュとしての星の数が増え、最高位は星3つです。

毎週月・火・水曜(祝日を除く)の週3日、17時から19時まで活動を行います。英語での対応も可能で、東京オリンピック・パラリンピックに向けたインバウンド体制も整えています。次年度以降は、活動の幅を更に広げ多言語対応の国分寺MAPの作成やコンシェルジュ活動時間の充実を図る予定です。

## R&Iの格付で 「A+(安定的)」を維持

格付投資情報センター(R&I)は2018年12月11日(火)、東京経済大学の信用格付を公表しました。格付は「A+(安定的)」でした。本学は、2004年度にR&Iによる格付「A」を取得。2005年度から2007年度は「A(ポジティブ)」、2008年度に「A+(安定的)」に格上げ以降、現在までこれを維持しています。

格付けの主な理由は、大学の立地条件、教育や就職支援面での面倒見の良さ、志願者の学力水準が継続的に向上している点などが挙げられています。

# 東京経済大学 創立120周年 記念事業募金



創立一二〇周年記念事業募金につきましては、学内外の皆様からのご支援ご協力により、二〇一八年十一月十日までに、二〇四三件、三億二七六八万二〇一二円のご寄付を頂戴いたしました。皆様のご厚情に深く感謝申し上げます。今回は、二〇一八年五月二十一日から二〇一八年十一月十日までに受け付けましたすべての寄付者のご芳名を掲載させていただきますました。カッコ「」内の金額は本事業募金開始から二〇一八年十一月十日までの累計額です。

引き続きご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

二〇一九年一月 学校法人 東京経済大学 理事長 後藤 鉄四郎

東京経済大学 学長 岡本 英男

(注)

・ご寄付を追加された場合は、累計額により再度掲載いたします。  
・寄付金受領証明書(領収書)及び免税書類はその都度お送りしています。  
現在、創立一二〇周年記念事業は計画通り進んでおります。  
今後とも、皆様のお力添えをいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。

校友センター 創立一二〇周年記念事業募金室

TEL 〇四二・三二八・六一〇〇

FAX 〇四二・三二八・八〇二九

Email: bokin@stku.ac.jp

## 創立120周年記念事業募金応募状況

2017年2月1日～2018年11月10日申込分

	件数	金額(円)
一般法人/卒業生法人	68	118,058,000
卒業生	1,686	143,924,867
卒業生団体	63	5,248,645
在学生父母	99	2,466,000
一般	15	686,500
法人役員/教職員	112	57,298,000
合計	2,043	327,682,012
目標金額		20億円

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

## 120周年記念スポーツ・文化振興募金

二〇一八年七月より「120周年記念スポーツ・文化振興募金」の募集を開始いたしました。

学生が課外活動をとおしてチャレンジする環境を整えることを目的に、現在活動中の体育会・文化会所属のサークルを指定して寄付をしていただき、大学から該当のサークルに運営費として同額を補助いたします。

※詳細は大学ホームページをご覧ください。

二〇一八年十一月十日までに各サークルへお申し込みいただきました方々のご芳名、寄付金額を掲載いたしました。

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

## 東京経済大学教育振興資金寄付御芳名

「東京経済大学教育振興資金」の募集にあたり、保護者の皆様より多くのご協力をいただきました。ここに寄付を賜りました方々の御芳名を掲載し、深甚の謝意を表します。ご厚志は、教育の充実や奨学金制度の拡充などのために有効に活用させていただきます。

今後とも、本学発展のためにご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

二〇一九年一月 学校法人 東京経済大学 理事長 後藤 鉄四郎  
東京経済大学 学長 岡本 英男

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

## 東京経済大学に御寄付いただいた方々の御芳名

皆様より多くの御寄付をいただきました。ここに御寄付を賜りました方々の御芳名を掲載し、深甚の謝意を表します。ご厚志は、東京経済大学の教育および学生支援のより一層の充実のために有効に活用させていただきます。

今後とも、本学発展のためにご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

二〇一九年一月 学校法人 東京経済大学 理事長 後藤 鉄四郎  
東京経済大学 学長 岡本 英男

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

## 「ゼミする東経大」

## 各学部でゼミ研究報告会を開催

年間を通じて研究してきたゼミ活動の報告の場として「ゼミ研究報告会」が、2018年11月17日(土)のコミュニケーション学部を皮切りに12月5日(水)には現代法学部、12月8日(土)に経済学部、経営学部、総合教育演習のゼミ報告会を行いました。今年は、全学で総勢74ゼミ126グループが参加し、日ごろの研究成果を在学生や卒業生、外部の方の前で報告しました。どの発表者も丁寧に行ってきた研究結果を聴衆に熱心に伝え、それぞれの普段のゼミの雰囲気まで伝わり各報告会は大変な盛り上がりを見せました。

本学では「ゼミする東経大」を掲げ、各ゼミでの学びを通じてより深い専門知識や教養を養うと共に、他者と協働する力や情報収集・分析力、コミュニケーション能力などの社会に出て活躍するための力を身に付ける教育の場としてゼミ教育を重視しています。

本学の大きな特色の一つでもある「ゼミ活動」の一端をご覧いただけるこのゼミ研究報告会は、高校生やその保護者、高校等の先生方に本学の教育活動を知っていただく機会として公開しています。

